

平成二十二年一月一日発行（毎月一回）日発行 通巻八四〇号
昭和二十五年四月二日第三種郵便物認可

火星

平成二十二年一月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

バスツアー蓮の枯に降り立ちし

マスクし合うて東京へ行く日和

梟の森をうしろに越天楽

屋上に萩枯れてゐる昼の月

枯野来し男加はる丸き卓

蕪村忌のゑのころに咲く霜の花

凧の高階に鍋ひた磨く

太白星の山へもどりし飾り売

顔見世のうすくれなゐに時雨けり

背山より雪飛びきたる年の市

第十三回 火星賞

山本耀子

平成二十一年度の火星賞を右の通り決定
致しました。

平成二十二年一月

火星俳句会主宰

山尾玉藻

推薦の言葉

壬生念佛かひなに齢ありにけり
老鶯の啼ける全身見たりけり
二十年度、山本耀子さんの作品の視点や重量感に注目
しつつも、一定した力量と言う点で少し不安を覚えてい
た。しかしその後、耀子さんの作句力は着実に確実に育
まれていった。

臥す母が臘梅の香に首もたぐ
青梅やにはとりの影伏せ籠に
雪解川対岸は顔照らされて
昼近く汚れてゐたる烏賊釣火
いずれの写生句にも内にこもる感慨は相当細やかなも
のがある。確かな表現力に所以する。

祓はれて福笹重くなり
塵となり掃く花びらの逃げやすし
遣り水のたどりつきたる菖蒲の芽
鉾立や枕当てある心柱
こころの写生への踏み込みがあり、自然界の生命の機
微への参入があり、画家として一家をなす耀子さんなら
ではの独自の着眼がある。

施餓鬼寺粒のきはだつ握り飯
意志が強く自己に妥協せぬ耀子さん自身が投影され
る、こころばえある作品である。
気を緩めると俳句は忽ち行方を暗ます。耀子さんの一
層の精進を期し、お祝いを申し上げます。

太白星

柳生千枝子

猫抱いて猫の重さや萩の庭
戸を閉めに出て遅月の琥珀いろ
路地の萩水のやうなる風一筋
撫子や少年が跳ぶ水溜り
頬杖の頬が冷たし鳥渡る
耳とほき父の無口やちちる鳴く
蟪蛄の思はぬ飛翔日箭の幅

杉浦典子

老鹿の角あるやうに立ちにけり
鹿の背にひと日のほてりありにけり

虚子館に潮の香とどく十三夜
箱魚籠の太刀魚の丈擱みだす
心電図の線きれいな小鳥来る
鬼胡桃ポケット多き服が好き
だまし絵を斜かひに見て日の短か

浜口高子

鳥渡る弥生の臥所薄日さし
鳥渡る鍛冶の火花の上がる町
大花野離れたり櫂ひと突きに
紅茸を見つけし夜の俄かなり
稲ぼこりの向う鳩啼きにけり
窓の外の人に野分の来てゐたり
新藁で両手こすりに馬の胴

火星作品

山尾玉藻選

色鳥や築山高き迎賓館
宝塚山本耀子

椿の実はじけ男の寒がりぬ

石鼎庵に隣る分校年木積む

神留守の巖をまはる瀬音かな

杉山のてつぺんに日や冬菜畑

角伐りし鹿を放つに手順あり
八幡大山文子

ジニールの袋のくもる榎植の実

雨音のはつかとなりし柚釜かな

秋の虹若草山の裏知らず

父に摘む撫子母に摘む野菊

鶏頭の雨鶏頭の葉を打てる
大和郡山城 孝子

なんぼでも糸瓜生り父病んでをり

月光にかはいてゐたる鶉籠かな

溜池の向う日当る晩稲刈
色鯉の水押ししてくる十三夜
火祭や触れのをとこの酒臭き
十六夜や有馬に入りて皆しづか
印南野や野分うねりし澳のあり
検番いま突つかひ棒に烏瓜
明日つかふ大釜ふたつ流れ星
神鹿の銜ふる穂草震へをり
伊吹山の三角点を秋の蛇
風に揺るるものにまぎれず鳥兜
人声のおのづから澄み落葉山
霜凧や暇の朝のうつくしき
木菟鳴くや寸胴鍋に水張られ
山月にそよぎはじめし魯かな
色変へぬ松へ寄せける舳かな
初鳴や肩の触れ合ふほどの仲
角伐らる鹿に傾げり松の空

宝塚蘭定かず子

八幡丸山照子

神戸深澤鱻

選のあとに

山尾 玉藻

なんぼでも糸瓜生り父病んでをり

城 孝子

神留守の巖をまはる瀬音かな

山本 耀子

谿川のありのままの景で、「神の留守」もありのままの配合であったのだろう。しかし、一句に他の介在を許さない静寂と張りがあり、その点で絶対の配合と言える。作者にとつて「神の留守」は啐啄のごとく得た季語、賜った季語であったのだろう。この感触は、計らいを捨て分別を超えたところが素直に働いた瞬間にのみ得られるものである。絶妙の二物配合により清澄で穏やかな空間が描かれている。

秋の虹若草山の裏知らず

大山 文子

山焼きで知られる「若草山」はお椀を伏せたような低い山で、普段は山として余り意識しない。実際の「若草山」の後ろには原生林の春日山が聳え立っている。しかし作者はそれを言っているのではなく、この山にも裏側があるのだなあと改めて思ったのである。「秋の虹」は滅多に見られないが、だからこそ作者はそれが架かった「若草山」に改めてところを遣り、いつにない思いをふと抱いたのである。

糸瓜は手をかけなくてもよく育つ。しかし父親が病に臥せる今、作者にはよく太って鈴なりの「糸瓜」が鬱陶しく思えるのだろう。「なんぼでも」の俗な表現のひびきに「糸瓜」に対する誹りが感じられるが、それは病の父を案ずる心情の裏返しとも言える感情の現れであろう。

木菟鳴くや寸胴鍋に水張られ

蘭定かず子

「木菟」の声と水が張られる「寸胴鍋」の存在を表出しているだけで、後は口を噤んでいる。無関係の二つの事象が不思議に照応し、現出される光景が何かへ展開する予兆が感じられる。実から虚が見えてくる景、或いは実が虚を引き出す景、そこにこそ詩がある。

風に揺るるものにまぎれず鳥兜

丸山 照子

当然、「鳥兜」も風に揺れているのであろうが、あくまでも「鳥兜」として揺れている、と作者の眼に映ったのである。そのような作者のこころを形象化した表現が「風に揺るるものにまぎれず」なのである。「鳥兜」への深い実相感入がある。

(以下略)

恒星圈

坂口夫佐子

流されし橋を見に來し雁の空
法螺貝や山ふくらます葛嵐
蓴菜の根のからまりを秋の雨
鹿声にもう振り向かぬ山路かな
秋灯疵の浮き立つチエロケース

木野本加寿江

城孝子

あかのまま新薬師寺に行きそびれ
貼り替へし障子明りへ机寄す
貴船菊竿の高さに咲きてをり
線香に酔うてをりけり猫じやらし
羽根布団そろりと踏んで猫來たる

僧兵の通ひし徑や葉鶏頭
ちちははの無くて色づく次郎柿
頭の大き鹿が佇む夕紅葉
鹿の妻寝ねしころなりみかん食ぶ
水車小屋に朝日さし込む冬支度

小林成子

白数康弘

ひと呼吸おきて竿振る鯨の秋
落語会のはじまつてゐる石榴の実
行者みち煙茸にて引き返す
初鴨や管理棟より煙立ち
汲み上ぐる汽水に秋の入日かな

しめ縄は大蛇の形豊の秋
草の花郡にひとつ式内社
ばつた跳びをり千年を経し社
神杉の梢の揺れゐる雁渡し
奉納の絵馬の跳ねやう昼ちちろ

獅子座

山尾玉藻推薦

助口弘子

銅鐸の音に向きかへし秋津かな
飛火野に鹿の疾走神の留守
荷をちよつと宿にあづけし時雨月
山鳴りの中の眠りや榎櫃の実

川端俊雄

山に川に神坐す里の紅葉かな
彩鯉に照る日翳る日松手入
石鼎の襜包や肩のとがりある
幸点すごとくにさるとり茨の実

笠置早苗

かまつかの遠目にあるは焰立つ
猿沢の池に消えけり秋の雲
鹿に会ひ仔鹿に会うて日の昏れし
末枯や南大門を乳母車

天谷翔子

月光のあたごふるみちたれも見ず
唇を押しつつけられし芒傷
押し花の如し歩道に柿踏まれ
掌より掌へ木の实渡せばこぼれけり

涼野海音

秋風を聞いてゐるなりガードマン
銀色の投票画や小鳥来る
待ち人の来ず赤い羽根吹かれをり
自転車を押して高きに登りけり

岡村尚子

山上に大き魚棲む紅葉冷
次の間に赤子の眠る栗ごはん
山頂の郵便ポスト鳥渡る
抱き上げて嬰の泣きやむ虫の夜

西村節子

全身を預け眠る子野分晴
鶏頭を逆手握りに刈りにけり
竹騒に目覚む丹後や後の月
白萩を分け子規の碑を覗きけり